古文

古文　古人の生き方［物語］

伊勢物語

芥川【全二回】

講師
吉田　茂

学習のねらい

芥川【一】

長年思い続けていた女を盗み出し、逃避行を続ける男の心情を読み取ります。また、「白玉か」の歌に込められた男の心情を理解しましょう。さらに、絵巻の絵を解釈することによって、この男と女の恋の物語を振り返ります。

● 学習のポイント ●

〈一〉男と女の逃避行を読み取る

〈二〉男の心情の推移を追跡し、歌に託された男の思いを理解する

〈三〉絵巻を確認しながら、この物語を振り返る

■男と女の逃避行を読み取る

長年求婚し続けた女をやっとのことで盗み出した男は、闇夜の中、逃避行を続けます。男に背負われた女は、キラキラッと光って見えた草の上においた露を、「あれは何ですか」と尋ねますが、先を急ぐ男には答える余裕がありません。

【重要語句】

- え（副詞）…（下に打消の語をともない）…できない。
- 得（ア行下二段動詞）…手に入れる。結婚する。
- よばふ（ハ行四段動詞）…求婚する。呼び続ける。
- 率る（ワ行上一段動詞）…引き連れる。ともなう。

【読解のポイント】

① 同格の格助詞「の」

- 「の」の前の語句と後の語句とが、一つの文の中で同じ価値を持つ語として、並んでいることを同格という。
- 一般に「で」と訳し、後の語句の下に体言（名詞）がない場合は、前の語句の体言を補って訳す。

女のえ得まじかりけるを　女＝え得まじかりける（を）

え……まじかり（打消推量の助動詞「まじ」の連用形）→ 不可能

（意味……女で、手に入れられそうもなかった女を）

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

② この女はどのような境遇の人物だったか
手に入れられそうもなかった女性。露も知らない女性。
→身分の高い家柄の姫君で、家の中で大切に育てられている女性。

■男の心情の推移を追跡し、歌に託された男の思いを理解する

深夜、激しい雷雨にみまわれた男は、女を荒れ果てた蔵の奥に入れ、夜を明かそうとします。ところが、鬼が女を一口に食ってしまったのです。恋する女を失った男は、どうしようもなく、悲嘆と絶望に満ちた歌を詠むしかなかったのです。

【重要語句】
- あばらなり（形容動詞）……荒れ果てている。
- あなや（感動詞）……ああ。あれぇ。
- やうやう（副詞）……しだいに。

【読解のポイント】
①「なむ」の識別
未然形＋「なむ」（願望の終助詞）他に対しての願望（……してほしい）
連用形＋「なむ」（完了（強意）の助動詞の未然形「な」に推量の助動詞「む」の終止形「む」が付いたもの）（きっと……だろう）
連体形＋「なむ」（強意の係助詞）

②「露」→はかないもの、はかない命の喩（たと）え。
「消え」は「露」の縁語。

③「まし」は反実仮想の助動詞。ここでは、実現不可能な希望の意を表す。

「伊勢物語絵巻」（模本）

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

■絵巻を確認しながら、この物語を振り返る

絵巻などの絵の意味を解釈することを「絵解き」といいます。これを行いながら、この恋の物語を振り返っていきましょう。

【絵巻の見方】

- 右から左へと見ていきます。
- 「異時同図」という手法で描かれていますので、同じ人物が何度も描かれますが、別の人物ではありません。
- あくまでも、物語の一つの解釈であることを踏まえ、見てください。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

芥川【二】

実は「芥川」には続きがあるのです。物語の続きの内容を理解し、前回読んだ部分と、続きを含む全体を読んでみて、どのような違いがあるか考えてみましょう。また、「芥川」における和歌の役割を理解します。さらに、『伊勢物語』が後世の文学や芸能にどのような影響を及ぼしたか、その一端を理解しましょう。

学習のねらい

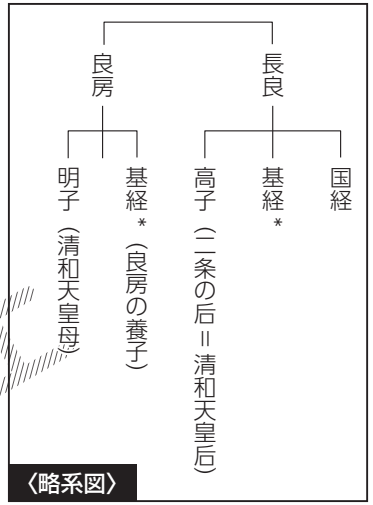
● 学習のポイント ●

〈一〉物語の続きの内容を確認する
〈二〉この物語における和歌の役割を理解する
〈三〉『伊勢物語』の後世への影響の一端を知る

■物語の続きの内容を確認する

女はのち「二条の后」と呼ばれる、藤原高子であることが示されます。男に盗み出されて、女が泣いているところを、兄の基経・国経によって救い出されたのを「鬼に食われた」と表していること、高子が後宮に入る前のことだと真相が明かされています。続きの部分の有無によって、物語がどのように違ってくるか、考えましょう。

前半のみ＝昔話・説話的な物語
……絵巻も同様
全体＝政治的・歴史的な物語



〈略系図〉

■この物語における和歌の役割を理解する

女を失った男の悲嘆や絶望感が凝縮されて表現されているのが「白玉か」の和歌です。このように、和歌には人間の感情を凝縮して、三十一音で表現して見せる力があることを理解しましょう。

・神話時代、ヤマタノオロチの退治で有名なスサノオノミコトが出雲で詠んだ、次の歌が和歌の起源とされています。

八雲立つ　出雲八重垣　妻こみに　八重垣つくる　その八重垣を
（盛んに雲がわき立つ出雲の幾重にもめぐらした垣根、妻を籠もらせるために八重垣を造る、その美しい八重垣を。）

・『万葉集』が編纂されたのが八世紀の半ばのことですから、それから数えても、和歌には千二百年以上の歴史があります。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

・ある語源説に、うた（歌）と、うった（訴）えるの「う（っ）た」がもともと同じで、心情を他者に対して訴えるものが「歌」という考えがあります。

■『伊勢物語』の後世への影響の一端を知る

『伊勢物語』は作品として広く読まれたばかりでなく、いろいろな分野に影響を及ぼしました。ここでは、特に文学や芸能に限定してお話ししますので、影響の一端を理解しましょう。

平安時代……『源氏物語』やそれ以後の物語に影響を与えました。『源氏物語』の主人公である光源氏の人物造型にも何らかの影響があると思われます。

鎌倉時代……『伊勢物語』が歌作りの教科書として用いられました。『伊勢物語』の注釈書も書かれるようになりました。

室町時代……能を大成した世阿弥が「雲林院」「井筒」など、『伊勢物語』から材を得て、能の曲を創作しました。「雲林院」は古い作品を世阿弥が改作したものです。また、のち再度の改作がなされ、現在の曲になっています。「井筒」はたいへん人気のある能です。

江戸時代……木版印刷の普及で、絵入りの『伊勢物語』が出版され、多くの人々が『伊勢物語』を読み、楽しみました。『仁勢物語』（作者不詳、一六四〇年までに刊行された）というパロディまで登場します。

現代……例えば、俵万智の『恋する伊勢物語』、高樹のぶ子の『小説伊勢物語　業平』などがあります。

機会があれば、『伊勢物語』全文を、現代語でもよいので読んでみてください。「昔、男」の新しい一面を見出すことができるかもしれません。また、古典芸能の一つである能にも興味を持っていただきたいと思います。実際に舞台を見るのが一番よいのですが、テレビなどでも放送されることもありますし、さまざまな映像資料もありますので、それらを活用して、御覧になるのもよいと思います。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

『伊勢物語』豆知識

- 作者不詳。
- 十世紀初頭までには原型ができ、のちに増補や改訂がなされ、今の形になったのは、十世紀後半頃と考えられています。
- 「昔、男……」、「昔、男ありけり。……」と書き出されます。
- 男のモデルは、歌人で有名な在原業平（八二五～八八〇）とされています。業平の祖父は平城天皇ですから、もとは皇族の家柄です。
- 成人の儀式をすませた男の恋の話から始まり、男が死ぬ直前、歌を詠む話までの、およそ百二十五段からなる歌物語です。いわば、男の一代記とも言える作品です。
- 『伊勢物語』では業平らしき男の恋の話が多く描かれますので、業平は平安時代一番のプレイボーイと言われることもあります。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

NHK 高校講座 ラジオ学習メモ

古文

伊勢物語

講師
吉田　茂

芥川

昔、男ありけり。女のえ得まじかりけるを、年を経てよばひわたりけるを、からうして盗み出でて、いと暗きに来けり。芥川といふ川を率て行きければ、草の上に置きたりける露を、「かれは何ぞ。」となむ男に問ひける。行くさき多く、夜も更けにければ、鬼ある所とも知らで、神さへいといみじう鳴り、雨もいたう降りければ、あばらなる蔵に、女をば奥に押し入れて、男、弓、胡籙を負ひて戸口にをり、はや夜も明けなむと思ひつつゐたりけるに、鬼はや一口に食ひてけり。「あなや。」と言ひけれど、神鳴る騒ぎにえ聞かざりけり。やうやう夜も明けゆくに、見れば、率て来し女もなし。足ずりをして泣けどもかひなし。

白玉か何ぞと人の問ひし時露と答へて消えなましものを

【第六段】

【現代語訳】

昔、（ある）男がいた。女で、手に入れることができそうもなかった（高貴な）女を、長年にわたって求婚し続けてきたが、やっとのことで、（女を）盗み出して、たいそう暗い夜に逃げて来た。芥川という川のほとりを連れて行ったところ、草の上に置いている露を（見て、女は）、「あれは何ですか。」と男に尋ねた。これから行く道のりは遠く、（そのうえ）夜も更けてしまったので、鬼のいる所とも知らないで、そのうえ雷までたいそうひどく鳴り、雨もひどく降ってきたので、（男は）荒れ果てた蔵（の中）に、女を奥の方に押し入れて、男は弓を持ち、胡籙を背負って（蔵の）戸口にいて、早く夜が明けてほしいと思い続けながら（戸口に）座っていたところが、（蔵にいた）鬼が早くも一口で（女を）食ってしまった。「あれぇ。」と（女は）叫んだけれども、雷の鳴る騒がしい音のために（男は悲鳴を）聞くことができなかった。しだいに夜も明けてきたので、（蔵の奥を）見ると、連れてきた女もいない。（男は）足をすり合わせて泣くけれどもどうしようもない。

あの光るのは、真珠ですか、何ですかとあの人が尋ねた時に、あれは露ですよと答えて、（私も露のように）消えてしまえばよかったのに。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。

【参考　続きの本文】

これは、二条の后の、いとこの女御の御もとに、仕うまつるやうにてゐ給へりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、盗みて負ひて出でたりけるを、御せうと堀河の大臣、太郎国経の大納言、まだ下臈にて、内裏へ参り給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめて取り返し給うてけり。それをかく鬼とは言ふなりけり。まだいと若うて、后のただにおはしける時とや。

【注】

二条の后……藤原高子（八四二～九一〇）。長良の娘。清和天皇の后となり、のちの陽成天皇を産む。

いとこの女御……藤原明子（八二九～九〇〇）。良房の娘。文徳天皇の后、のちの清和天皇を産む。

堀河の大臣……藤原基経（八三六～八九一）。高子の兄。良房の養子となる。

国経……藤原国経（八二八～九〇八）。高子の長兄。

【現代語訳】

この話は、二条の后（藤原高子）が、いとこの女御（藤原明子）のお側に、お仕えするようなかたちで住んでいらっしゃったのを、高子は容貌がたいそう美しくていらっしゃったので、男が盗み出して背負って出ていったのを、高子の兄である堀河大臣基経、長兄の大納言国経が、まだ位が低くて、宮中へ参上なさる時に、ひどく泣く人がいるのを聞きつけて、（その人が妹だと知って、その場に）とどめて取り返しなさったのである。それをこのように、「鬼」が食ったのだと言ったのである。まだ二条の后がとても若くて、普通の人（入内前で、臣下の身分）でいらっしゃった時のこととか言うことだ。

このページの文書・画像の無断転載及び商用利用を固く禁じます。